

アガサ・クリステイ
創作の秘密

欺しの天才

ロバート・ハートマン著
小池野康司共訳

秀文

天才の欺し

——アガサ・クリスティ創作の秘密——

ロバート・バーナード著

小池 滋 共訳
中野 康 司

株式会社 秀文インターナショナル

Printed in Japan 1982

欺しの天才

アガサ・クリスティ創作の秘密

昭和57年9月15日 初版第1刷発行

定価 2,900 円

著 者 ロバート・バーナード

訳 者 小 池 滋
中 野 康 司

発 行 所 株式会社 秀文インターナショナル

〒170 東京都豊島区駒込 4-12-7

電 話 03-915-0800

(営業部) 03-949-2551

振替口座 東京 2-30079

組版・印刷 中央印刷／製本 イマキ製本所 0098-0211-3431

まえがき

本書は、おそらく今世紀最大の娯楽作家を論ずるわけだが、もとより文芸批評を意図したものではない。ましてや近ごろ盛んになってきた、大衆文学の学問的研究とやらに貢献しようというものでもない。まさに汽車旅の道連れに、切符を買うついでに、クリステイを買う人たちがもうひとつついでに、彼女のほとんど世界的な、一向に衰えを見せぬ人気の理由など考えてみるのも一興かと思つたまでである。

ところで、この種の本を書く際にこまったことがある。クリステイが駆使したさまざまなトリックを大々的に扱うわけだから、ときには種あかしも残念ながらやむをえないということである。これには反対の読者も多いことだろうが、わたしはただ、クリステイ本人もやっていることだからと弁解するしかない——たとえば『ひらいたトランプ』では『オリエント急行殺人事件』の種あかしが行なわれ、『もの言えぬ証人』にはかつての殺人犯人の名前が四つも出てくる。本書で犯人が明かされる

のはおもに第四章と第六章なので、クリスティの代表的な傑作をまだ全部お読みでない方は、この二章だけあとまわしになさるとよい。

また、これは気軽な読物として書かれたもので、学術論文めいた註や引用箇所の明示などは一切省くことにした。ただし、読者があとで参照したくなると思われるような引用に限り出所を記した。アメリカ版の表題（作者クリスティの許可なく勝手につけられたものである）については、初出の際にのみ併記し、以後は省略した。妻の作成による巻末の書誌が、表題上の混乱をすべて解決してくれるはずである。ただしこの書誌はけっして包括的なものではなく（限られた時間内では不可能な仕事である）各作品の出版史の概要を記さんとしたにすぎない。巻末の付録はすべて、世のクリスティ・ファンがまさに山なす作品群をより効果的に読み進む一助ともなればと作成されたものである。

最後に、本書が上梓される一九八〇年は奇しくも、アガサ・クリスティが作家活動中ほとんどづねに出版目録にその名を連ねていた、コリンズ社の「クライム・クラブ」創刊五十周年にあたる。

目次

まえがき

v

第一章 檢察側論告

1

第二章 「世界制覇の野望」

13

第三章 メイヘム・パーヴァへの道

27

第四章 意外や意外また意外！

49

第五章 作家の失踪

66

第六章	だましの戦術	82
第七章	傑作見本三つ	95
第八章	探偵覚え書き	125
第九章	被告側弁論	135
附録Ⅰ	著作目録	163
附録Ⅱ	短篇小説全索引	216
附録Ⅲ	参考文献	242
附録Ⅳ	解説つき著作リスト	246
附録Ⅴ	クリステイの映画化	273
附録Ⅵ	クリステイ作品邦訳題名索引	279
訳者あとがき		291

第一章

檢察側論告

1

探偵小説熱が頂点に達した一九四〇年代に、アメリカの批評家エドモンド・ウィルソン（一九〇五—一九五七）は、世をあげての称讃と熱狂にいちやもんをつけた。一九四四年から一九四五年にかけて書かれた二つのエッセイの中で、彼はまず、当時の探偵小説の異常な人気ぶりを伝えている。どのパーティに顔を出してもかならず探偵小説の話になるので、一冊も読んだことのない彼は仲間はずれの気分になった。みんなはあれやこれやの探偵作家をしきりに推薦してくれる。そこで、彼は奇特にも、友人や投書家連中（一九四四年十月十四日付の『ニューヨーク・タイムズ』の彼のエッセイに対して投書が殺到した）のお気に入りの作家たちを片っぱしから青息吐息で読んだ。たとえばレックス・スタウト（一九〇六—一九七五）（「貧弱かつ未熟」）、ドロシー・セイヤーズ（一九〇七—一九五七）（「おもしろい分野を問わず、これまでに私がお目にかかった最も退屈な本」）、ナイオ・マーシュ（一九〇九—一九五九）（「無味

乾燥なオガクズ同然）、マージェリー・アリンガム（一九〇四）（「まったく読むに耐えない」等々。レイモンド・チャンドラー（一九五九）やダシル・ハメット（一九四九）（「新聞漫画の域を出ていない」）を含め、今日一定の評価を得ている探偵作家を彼はつぎつぎに組上にのせ、全員軽蔑にすら値しないと結論を下す。ばかばかしいウソの連続のじつに子供じみたストーリー、よくてせいぜい月並な人物描写、わが目を疑うばかりのひどい文章——まったくのはなし、ドイル以後の探偵小説には、いやすくも文学的教養のある人間がまともにつきあえるものはただのひとつもない、云々。

これはこれで結構。——なんなら、ひとまず彼の観点に立って非難のほとんど、あるいはすべてに同意してもよい。ところが、彼はエッセイのひとつに、「誰がロジャー・アクロイドを殺そうと構うものか」という題をつけた。じつはこれこそ、彼に大いに考えてもらいたかった問題なのである。とくに『アクロイド殺害事件』の正確な売上げ部数を示す必要はなからう。クリスティ作品のペーパーバック版の売上げがアメリカ国内だけでもかるく二億部をこえ、全世界では優に五億部をこえ、彼女は——シェイクスピアと聖書について——世界第三位のベストセラー作家だということを確認すればよからう。つまり、じつにおびたらしい人々が、誰がロジャー・アクロイドを殺したのか大いに構っているのである。そして、まさにこのベストセラー作家についてウィルソンはこう言ったのである。「彼女の作品は気の抜けた凡庸きわまるしろもので、私にはまったく読むに耐えない」

このにわかに信じがたい売上げ記録はひとえに本の力によるもので、テレビや映画（ほとんどが粗悪品だった）との提携などとは一切関係ない。したがって彼女の成功は、まず書評で宣伝し映画化に

よって一大ベストセラーに仕立てあげるといふ最近のスリラー作家やスパイ作家たちの成功とはまったく別物である。雨が降ろうが槍が降ろうが、アガサ・クリステイは毎年毎年かならず出版社に原稿を渡し、出来上がった作品は毎年毎年自動的に英米のベストセラーのトップに踊り出て、たいいてい数ヶ月はそのまま居座った。そこで、なぜ探偵小説がこれほど人気があるのかという問題とはべつに、もうひとつ、なぜアガサ・クリステイなのか、なぜ彼女の作品だけが、他の凡百の同業者を尻目に一頭抜きん出た歓迎をうけるのかという問題がでてくる。

そしてエドマンド・ウィルソンは、探偵小説のただならぬ人気の意味がわかっていないと同時に、ファン層の問題もまるでわかっていない。クリステイのきちがいじみた売上げ記録よりはるかに興味深いのは、そのファン層の厚さであり広さである。数年前の夏のこと、私がイタリアのある海岸で寝そべっていると、となりのデッキチエアで中年のイタリア婦人がシニョリーナ・マーブルものを読みふけていた。それから二日後、北極圏はノルウエーのトロムセの町をぶらついていると、今度は十代の少女がやはりデッキチエアにもたれてフレーケン・マーブルものを読みふけていた。アガサ・クリステイは地球上のあらゆる言語に翻訳され、あらゆる国のあらゆる世代の人々が彼女の作品に何らかの魅力を感じているのである。結局は全員降伏となりそうだ。一九四〇年にロシアは彼女の作品を、「主戦論者どものたくらみから大衆の注意をそらさんぐための……クリップス、ベヴィン、アトリー、チャーチルら(いずれも第二次大戦中の英国の中心的政治家)ハイエナどもの謀略」と評した。が、ほどなくして彼女の作品は、当のソビエト国営出版局の公認許可を得て店頭に現われはじめた。やがてまちはなくなり中国でも、

「大後退」の一環としてふたたび書店の棚に姿を見せることだろう。このような世界的な人気から、あるいはターザンものや西部劇の荒唐無稽な単純さを連想するひとがいるかもしれない。しかしどうだろう。英国の田舎屋敷、英国の小村が舞台である。それがかくもまちがひなく万人の心と頭をとらえるというのは、一体どうしたことだろう。

というのも、彼女は国や世代の相違をのりこえているだけではないのである。あらゆる階層、あらゆる知識層にも同じように人気があるらしいのだ。むしろ中流階級の読者が圧倒的に多いだろうが、これはいかなる作家にもいえることだ。はたしてD・H・ロレンス(一八八五—一九三〇 英国の作家)やジョージ・オーウェル(一九〇三—一九五〇 英国の作家)やデイヴィッド・ストーリー(一九三三— 英国の作家)が、ブートル(一八八五—一九三三 英国西部の港町)の裏通りでむさぼり読まれただろうか。中流階級の読者が圧倒的に多いことは、いやしくも作品の名に値する作品を書いた作家ならば共通していえることである。アガサ・クリステイの労働者階級の読者数はおそらく大衆作家中ピカ一だろうし、べつに意外ではないが、彼女はバッキンガム宮殿でも愛読されているそうだ。

しかしまあ、いずれ頭の単純な連中にうけているんだろう、などとは見くびってはいけない。彼女は鮎夫や店員や年老いた年金生活者たちに読まれる一方で——エドモンド・ウィルソンは優越感たっぷりなため息をもらしていたけれど——れっきとした学者、政治家、科学者、芸術家たちにも読まれているのである。この連中は汽車の中ではターザンものなど恥ずかしくてまず読まんだろうし、ジェイムズ・ボンドものなら『ガーディアン』紙(英国の進歩的日刊紙)のあいだにかくして読む。しかしクリステイな

らば、何らためらわずに大つぱらに読むにちがいない。ふたたび言うならば、たしかにクリステイの書くものは知的にも社会的にも取るに足らぬものかもしれないが、ここ二、三十年をみてディラ・ン・トマス(一九一四—一九五三。英國の詩人)、ジョー・オートン(一九三三—一九六七。英國の劇作家)、ピーターおよびアントニー・シェイファー(一九二六。其作もする双子兄弟の劇作家)といった一流の文学者たちがそのみごとに諷刺やパロディを書き、さらに前の世代にいたっては、オックスフォード大学英文学教授のJ・I・M・ステュアート(一九〇六—イネス)、詩人のC・D・ルイス(ニコラス・ブレイク。一九〇四—一九七二)、経済学者のG・D・H・コール夫妻(一八九三—一九五九)といった、たんなる金儲けとは思えないきわめて質の高い実作者まで輩出しているのである。ウィルソンのようないちゃもんをつける人間はこれからも出ることだろう——みんなが楽しんでる探偵小説の面白さが自分にはわからんといって、わざわざひとの楽しみをぶちこわしにかかる連中である。ただしこの連中の苦しげな自己弁護の口ぶりには、少数派——しかもきわめて少数の少数派——意識がはつきりみてとれる。これから論ずる作家クリステイにかぎっていえば、その人気は(ディケンズ同様)全世界的なものであり、民族、膚の色、階級、教養といったありとあらゆる障害をのりこえている。

「誰がロジャー・アクロイドを殺そうと構うものか」という質問もしくはいちゃもんにたいする回答はしたがってきわめて簡単である。「万人」とまではいかないまでも、現代作家のなかではいちばんこれに近い多くの人々から、大いに構われているのである。だがむろん、たんに人気抜群というだけでは、彼女の作品をクズ同然としか見ない連中——たとえばエドマンド・ウィルソンを黙らせるこ

とはできないだろう。ジェイムズ・ボンドものの売上げ部数を見たからといって、にわかに見方が変わるものもあるまい。アガサ・クリステイの作品にたいしていつも言われる非難は文字通りきわめて深刻なものであり、命取りにさえなりかねない。もっともこれは——のちほど示すように——彼女の作品にたいする基本的な誤解から生ずるものだとは思うのだが、とにかくその非難を列挙して公開する必要がある。そこで、かたちだけでも公正を期するために、私はしばらく検察側弁護人を務めることにする。

クリステイの作品にたいして第一にかつ最もしばしば言われる非難は、人物描写が——ほかの探偵作家とくらべてさえはるかに——おそまつだということである。古典期（本書では便宜上おおまかに一九二五—五〇年とする）の作品でも彼女は、手持ちの紋切り型の人物をとっかえひっかえひっぱりだしては紋切り型の役を演じさせている。たとえば尊大かつ退屈なインド帰りの退役大佐、口やかまし屋の老嬢、成上りの俗物実業家、うぬぼれ屋の男優もしくは女優、ろくでなしの若者等々。いってみれば彼女は、おそまつな紋切り型の人物カードを一式持っていて、新作に取りかかると際にはずそのカードをよく切り混ぜ、十枚ほど引き抜いては容疑者の配役を決定するのである。むろんごくまれにはかなり複雑な心理描写もみられる。たとえば『五匹の子豚』の女たらしの画家とこれをめぐる女たち、『ゼロ時間へ』の大金持の性格破綻者の青年。だがこれとても、三流小説の人物描写の域をほとんど出ていない。

しかも、この手持ちの紋切り型の人物像はほとんどすべて、両大戦間のイギリスの、複雑な階級構

成のごく一部分から抽出されたものである。つまり中流から中流上層階級の人間ばかりで、たとえば軍人、牧師（ただし田舎牧師のみ。それ以上の高職はけっして登場しない）、植民地帰り、田舎地主、繁昌している（あるいは長年開業している）医者もしくは歯医者、といった具合。それにむろん、この男たちに付き従う——クリスティの作品ではつねにそうだし、『自伝』で言明しているように）——うあるべきだと彼女は考えていた——女たち。どうみても、社会の断面図としては適当ではない。名探偵の追求に耐えうるほど利口な殺人犯人は労働者階級にはいないとでもいうのだろうか。舞台がイギリス国外の場合でも、人物描写にほとんど変化はない。さまざまな国籍の、だがいずれも金持の旅行者が登場する。たいていは有閑階級だが、たまに職業を持った人物が登場しても、実際に仕事をしている姿にはまずお目にかからない。そもそもクリスティの小説でお目にかかれる仕事は考古学ぐらいなもので、これは汗をかこうがかくまいがあらゆる労働のなかでもっとも労働らしくない労働である。

なるほど晩年になると、コーヒーバー（スタンドでコーヒーを出す飲食店）とか、ミニスカートの娘とか、不安定な社会を反映したノイローゼ気味の青年とかいった、一九五〇年代、六〇年代の新しい風俗も取り入れて、作品世界の幅を広げようと努めてはいる。だが結果は、かならずしもはかばかしくない。疑わしきは罰せずの精神で公正を期そうというわけで、年寄りが年寄り仲間にもわかって懸命に若い世代の説明を行なっているという印象をまぬがれない。そして往々にして、この種の奮闘努力ははなはだこまりものである。

作品の舞台はほとんどがイギリスの小村を装つたおとぎの国である。登場人物の階級構成の場合と同様、あれは村の一部分であつて、けつして全体像ではない。おもに地主邸、牧師館、大小さまざまの品のいいお屋敷などからなり、貧困、不潔、病氣といったものはさりげなく無視される。加えて無味乾燥な文章のおかげもあつて、村の生活や村の構造がまるで感じられない。どうにでも取り換えがきく、一般化された千篇一律な村々である。同様にロンドンにはロンドンが感じられないし、メソポタミアにはメソポタミアが感じられない。われわれはいわば永遠の無人境にいるのである。

舞台の弱さは当然文章の弱さに関係する。「もし私に、エリザベス・ボウエン(一八九九—一九七三)や

ミュリエル・スパーク(一九一八—)やグレアム・グリーン(一九〇四—)のような文章が書けたら、う

れしくて天までとびあがつてしまうでしょう」とクリステイは『自伝』で言っている。実際、書けな

い。せいぜい平明な職人的な文章が書けるという程度で、文法的にもかなり締まりがなく、生命感と

か絵画的文章力といったものはみごとにない。彼女の作品はあれやこれやの文法現象を研究している

外国の言語学者たちの盛んな分析対象となつてゐるが(たとえばスウェーデンのフランク・ベール教授の「アガサ・クリステイの文体に関する考察」(一九六七)理由

はよくわからない。おそらく、やさしい単語ばかりなので外国人にもわかるからであろう。また彼女

の文章にはほとんどユーモアがなく、陽気で楽しいということはあつても、機知あふれるとまではま

ずいかない。公平にみて、ときには鋭い観察や批評をたくみにさしはさむことはある。たとえば『青

列車の謎』のなかでボワロは、退屈かつ安全な立派な青年と、ハンサムなろくでなしから同時に求愛

されて思い悩むヒロインの気持を考えながら言う。「そもそも道徳的価値なんてものはロマンティッ

クなものじゃありません。こいつをありがたがるのは後家さんだけです」しかし、たまにお目にかかるこうしたぶりとしたセリフも、すぐにいつものスエットプディング（牛脂などを入れ
た安物のパイ）のような文章にまぎれてしまう。同じ『青列車の謎』（最悪の作品だと彼女が自認している）のなかに、まるで何やらのパロディみたいなぞっとしない文章がある。

ローシュ伯爵はちょうど朝食を終えたところだった。メニューは香草入りオムレツ、ベアルヌ風ソースかけバラ焼肉、ラム入りサヴァランといったところ。黒々としたみごとな口髷をナプキンでそっとぬぐうと、伯爵はテーブルを立った。そして、あちらこちらにさりげなく置かれた美術品を満足そうに見やりながら別荘の大広間を抜けて行つた。ルイ十五世の使つた嗅煙草かぎ入れ、マリー・アントワネットのはいた絹子の靴、その他もろもろのつまらない骨董品。これらはみな、伯爵が恋をささやくために必要な舞台装置の一部であつた。

アガサ・クリステイが一時パリで音楽を勉強したと聞けば読者はなるほどと思うだろう。

ここでしばらく検察側弁護人は消えることにしたい。次の章でクリステイの社会的および人種的態度にふれる際にふたたび二、三厳しいことを言わなくてはならない。というのもこの点が——おそらく当然のことながら——彼女に反発を感じたり不覚にも魅力の虜となつた連中の非難が集中するところだからである。そこでざっと見たところ、起訴理由の要点は、彼女の作品がまったく取るに足ら

ぬ、時代遅れの、一部階級に偏した、社会的にも知的にも死物同然のくだらんものだということがある。いかにたあいのないナゾナゾでもないよりはマシだと考えるような、もっとも程度の低い頭脳に喜ばれるもので、これはもう一種の社会悪であるから、みんなが無視して早いところ廃れさせるのが一番だというのである。

だがそのまえに、伝統的なイギリス探偵小説にケチをつけるエドモンド・ウィルソンの声（最近のチャンドラー熱、ハメット熱のおかげでますます激しくなってきた）にたいしてもうひとつ言うことがある。というのは、さきほど見たようなそのきちがいじみた人気、まさに許しがたいまでの絶大な人気を、結局は彼らも認めざるをえないということである。現在活躍中の探偵作家のなかにも、古典的な探偵小説はすでに「化石」にすぎないと公言したがっているものは多い。だが、だがしかし……。こういう純古典的な探偵小説がさらにぞくぞくと書かれることはないかもしれないが、とにかく、読まれてはいるのである。ペーパーバック版でよく売れるのは最近の心理主義的推理小説ではなく、相変わらずクリスティやマーシュらの伝統的な謎解き探偵小説だということは、どの本屋でも知っている。クリスティにつづく推理作家世代——マイケル・イネス（一九〇六）、エドモンド・クリスピ（一九二二）、ジュリアン・シモンズ（一九二二）、マイケル・ギルバート（一九二二）ら——は大衆読者層にはほとんど衝撃を与えていない。さらにそのあとの世代——ルース・レンデル（一九三〇）、P・D・ジェイムズ（一九二〇）ら——がようやく大衆の「化石」好みを爪でひつかきはじめた程度である。これほど時代遅れでこれほど不適当なものが、現在なお、これほど抗しがたい魅力をもつとは……。なぜだ